

聖書：第二サムエル記 11章 14～27節

説教：主のことばをさげすむダビデ

1 罪を隠そうとするダビデ

1) ウリヤを殺す

ダビデは夏の昼下がり、屋上を散歩していたときに、若い女が裸になってからだを洗っているところを目撃してしまいます。側近に調べさせたところ、ウリヤの妻バテ・シェバであることがわかりました。ウリヤは兵士として戦いの前線にいます。夫が留守であることを知って、ダビデはバテ・シェバを自分の家に招きます。そのことからダビデの罪が始まっていきます。

しばらくして、バテ・シェバが妊娠したとの知らせがありました。ダビデの子どもであることは明らかです。もしこのことが世間に知られたら大スキャンダルになります。すぐにもみ消さなければなりません。そこでダビデは、ウリヤを戦場から呼び戻し、家に帰って休むようにと促します。バテ・シェバのお腹の子どもがウリヤであると見せかけるためです。推理小説ふうと言えばアリバイ工作ということです。ところがウリヤは家に帰ろうとしません。

最初の作戦が不調に終わったのを受け、ダビデはすぐに次の手を打ちます。ダビデは戦場で指揮を執っている將軍ヨアブにこんな手紙を書きます。15節。「ウリヤを激戦の真正面に出し、彼を残してあなたがたは退き、彼が打たれて死ぬようにせよ。」

將軍ヨアブはダビデの指示のとおり、強い敵が隠れているとわかっている最前線にウリヤを送り、戦わせます。最初は、ウリヤを援護するために多くの兵士と一緒に戦っ

ていました。ところが、途中でヨアブの部下たちはウリヤを残してなくなってしまいます。ウリヤとダビデの部下たちが取り残され、戦死します。

ウリヤは何か悪いことをしたのでしょうか。何もしていません。いやむしろ、神を信じる信仰者としてどこまでも忠実に歩んでいました。それなのに、ウリヤは自分の妻をダビデに奪われ、ダビデの罪を覆い隠すという目的のために殺されてしまうのです。こんなことがあってよいのか。誰もが思います。一つの罪を隠すために、もっとひどい罪を重ねて、ついには人を殺すことさえしてしまう。それもすばらしい信仰をもっていると思われるウリヤがそうするのです。

2) ダビデの民が殺される

ダビデの罪はそれにとどまりません。周りの人たちにも大きな影響を与えていきます。將軍ヨアブはダビデから送られてきた手紙を読んで、考えたはずで、ウリヤがダビデ王のきげんを損ねたのかもしれない。だからと言って、こんなことをしてよいのか。もしこの作戦を実行したら、ウリヤひとりだけではなく、ほかの兵士たちも巻き添えになって死ぬことは避けられない。今なら、おそらく軍法会議にかけられるほどの大問題になるはずで、何よりも、神の正義が曲げられているのです。ヨアブは、ダビデの命令をたとえそれがイスラエル王からのものであったとしても拒否すべきでした。ところがヨアブは拒否しない。命令を見て疑問には思ったか

もしれませんが、それでも従うのです。ダビデの罪はヨアブをも巻き込んでいきます。

それだけではありません。この作戦で誰が死んだのか。17節。「その町の者が出て来てヨアブと戦ったとき、民のうちダビデの家来たちが倒れ、ヘテ人ウリヤも戦死した。」ウリヤだけではなく、ダビデの家来たちも死にました。誰が殺したのか。敵であるアモン人ですか。まさかそう考える人はいないでしょう。ダビデが殺したのです。ダビデはウリヤだけではなく、自分の家来を殺したのです。そして、未亡人となってしまったバテシエバを悲しませることもなります。自分の犯した罪を隠すためなら誰が死のうと誰が悲しもうと、そんなことはどうでもよいのです。

2 主のことばをさげすむダビデ

1) ダビデの評価

ダビデの罪はヨアブにも大きな影響を与えます。ヨアブはこの事件についての報告をダビデに送ります。そのとき使者にこう語っています。20節。「もし王が怒りを発して、おまえに『なぜ、あなたがたはそんな町に近づいて戦ったのか。城壁の上から彼ら射かけてくるのを知らなかったのか。エルベシエテの子アビメレクを打ち殺したのはだれであったか。ひとりの女が城壁の上からひき臼の上石を投げつけて、テベツで彼を殺したのではなかったか。なぜ、そんな城壁に近づいたのか』と言われたら、『あなたの家来、ヘテ人ウリヤも死にました』と言いなさい。」

ここで出て来るアビメレクの話は、士師記9章50節以降に出て来ます。ギデオンの子であったアビメレクはテベツという町を攻めようと城壁に上ったとき、城壁の上にいる女が投げたうす石にあたり、倒れます。アビ

メレクは女の手で倒れたことを恥じ、部下に対しよう言います。「女が私を殺したと言わないように、おまえの剣で私を殺してくれ。」そのような歴史上の出来事がありました。ヨアブはそのことを引用しています。

何を言いたいのでしょう。ヨアブはこの作戦についての責任を問われる可能性を考えています。客観的に見るなら、ウリヤとダビデの家来が死に作戦は失敗したのです。

「だってヨアブはダビデの命令どおりに動いただけだ」と思うかもしれませんが、世の中はもっと複雑に動いています。ダビデは、ウリヤが死ぬようにせよと命じたけれど、ダビデの家来が死んでもよいとは言わなかったのです。アビメレクがかつて女の手で殺されてしまうほど城壁はかなり危険なところでした。そんなあぶないところへ、どうしてダビデの家来を送ったのか。ヨアブの作戦に大きな問題があったのではないか。ヨアブは、責任を問われることを恐れました。

そこで、ヨアブはダビデの口を封じるためにこう言わせるのです。「あなたの家来、ヘテ人ウリヤも死にました。」それ以上は言いません。日本語で「腹をさぐる」ということばがあります。ことばで言わなくても、相手が何を考えているのかがわかる。そんな意味です。ヨアブは、ダビデが神の前に正しくないことをしていると見抜いています。ダビデが作戦の失敗について何か文句があるというのなら、こちらにも言い分がある。ことばにはしていませんが、そのような脅しです。

ダビデはヨアブからの報告を聞いて、どのように反応したでしょうか。25節。「あなたはヨアブにこう言わなければならない。『このことで心配するな。』直訳すればこうです。「あなたの前に、このことで何も悪いところ

はない。」よく見ると非常に巧妙な言い方です。この事件の責任者は誰であるか何も触れていないのです。責任の所在をあいまいにしたまま、ただ何も問題がない、悪いところはない、心配しないで前に進みましょう。そう言っているだけです。ウリヤ殺害作戦に巻き込まれて自分の部下が死んでもダビデは知らない振りをし、責任をとるそぶりも見せません。

2) 神の評価

神はこのことをどのようにご覧になっていたのでしょうか。前回は触れましたが、神はダビデが罪を繰り返して行くことをあえて止めようとはしません。そのままにさせます。まるでダビデの罪がますますひどくなって深刻なものになっていくのを待っているかのようです。バテ・シェバがダビデの子を産んだとき、初めて主がダビデをどのように評価していたかが明らかにされます。27節。「しかし、ダビデの行ったことは主のみこころをそこなった。」

直訳をすれば、「主の前に、ダビデのしたことはひどい悪であった。」さきほど、ダビデがヨアブに応えたことばを比べてみてください。正反対です。どちらが正しいのですか。もちろん神の評価が正しい。いったいダビデの何が主のみこころをそこなったのか。具体的にすぐに思いつくのは姦淫の罪、殺人の罪、隣人の妻を欲しがったという罪、それからウリヤを殺せという偽りの命令を出したのですから偽証の罪も挙げられるでしょう。これらの罪を一つのことばで言い表すなら、結局ダビデは主のみことばをさげすんだ、あなどった、軽んじた、ばかにした、無視した。だからひどい悪と言われます。

主のみことばをさげすむことがどうして悪なのでしょう。みことばをさげすむとき、何が起きるか。人が殺されるのです。それも正しい人が殺される。正しい人の妻が嘆き悲しむことになるのです。事実がねじ曲げられ、罪が闇から闇へと葬り去られ、なかったことにされ、責任をとるべき者が責任をとらず、イスラエルの民を支配する。そんなことがいつまでも続いてよいはありません。

神はこのあとダビデを厳しくさばいていきます。たとえ主に油注がれたイスラエルの王であろうとも、たとえ主に愛されていたダビデであろうとも容赦がありません。言い逃れができない方法で、ダビデを責め立てます。なぜそうするのか。人を救いたいのです。救うために責めるのです。いったい何から救うのですか。罪からです。罪がどれほどひどいものは今見たとおりで。私たちを苦しめている根本的な問題である罪から救われることを、神は願い続けます。ではどのようにして罪から救うのか。救われるための楽な方法があると思うのでしょうか。残念ながらありません。最も見たくない自分の罪に真正面から向き合うしかない。そのために、神はダビデがやりたい放題にさせて、言い逃れできないところに追い込んでいくのです。それが神の方法です。

私たちの主であるイエス・キリストと私たちはどこで結びついているのですか。あなたはイエスを十字架につけなかったと言いますか。もしつけなかったというのなら、イエス・キリストと何の関係もありません。しかしもし反対に、私は主を十字架につけた者ですと告白するなら、イエス・キリストはあなたとこれ以上の強い関係が結ばれることとなります。

ダビデは最初、自分は何も悪いことはしていないと言い張ります。でもやがて預言者ナタンの口を通して罪を示され、自分は主を十字架につけた者であると告白していきます。

私たちもいつか自分の罪に向き合うときがやってきます。一度向き合ったからもう終わりということはありません。生涯死ぬまで、私たちは自分の前に自分の罪を置き、「私は主のみこころそこなうことしかできないのです」と告白していきます。そのとき主は私たちに近づいてくださり、こう語ります。「あなたが言い表してその罪の告白こそ、わたしにとって最上のささげ物です。わたしは喜んであなたのために罪の身代わりとなり、さばきを受け、いのちを捨てます。」

そのように語ってくださる主の御名をあげます。